



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第2講座よりの御挨拶
Author(s)	野田, 旺六
Citation	衛生工学, 1, 9-10
Issue Date	1958-08-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36125
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_9-10.pdf



才2講座よりの御挨拶

教授 野 田 旺 六

At the Start of the Chain of Sanitary
Engineering 2

(the division of Waste Water treatment),

Prof. Sōroku Noda

昨年4月から北海道大学工学部に全国大学に先がけて衛生工学科が新設され、従来の土木工学科から分離して独立の教室が生まれました。取り敢えず初年度は才ノ講座が土木工学科衛生工学講座からそのまま横すべりしましたが、本年度には才2講座の開設をみました。来年度は才3講座、来々年度には才4講座が開講される予定であります。各講座の内容などについては林教授が説明されている通りであります。才2講座の担当者として一言挨拶を述べたいと思います。

才2講座は都市下水道、工業廃水処理、下水道の計画建設及び維持、公共水の汚濁防止、原子力廃水の処理など、汚された水の諸問題を探究する部門であります。

従来わが国の大学では衛生工学が土木工学の一小分野として取扱われてように、廃汚水の問題はその衛生工学の中で、また上水工学の附随的項目のよう取扱われてきた嫌いが無いでもありませんでした。尤もそれは、大正末期から昭和10年前后までは失業救済事業の実施とともに全国都市に下水道ブームらしいものが起り、現在施設されている主なものは皆、この時に着工されたものであります。才2次世界大戦に遭遇するや、下水道事業は不急事業として打切られ、終戦後は戦災の復興は下水道事業にまでは手が、金がまわりかね、昭和10年頃から20年ものブランクができて了つて、他の公共事業等と比べて全然立ち遅れる始末となり、当時折角育成された多くの下水道関係技術者は他部門に転向逸散し、この方面の新技術者を養成しても、就くにその取場がなく、自然大学でも前述のような状態になつたことと思われれます。

しかし戦后10年余にして漸く戦災復興の成果も見えはじめ、経済的基盤

も定まりかけてきた今日、人口の急激な都市への集中、産業復興による工業廃水の増加によつて結果する公共水域の汚濁は年とともに深刻さを増し、一方原子力時代に入つてその残留放射能の恐威は、水その他食物となる動植物にも及び、加之、下水道不完備のため都市し尿の行詰りは、これに拍車をかけております。水資源の保存、環境衛生の面から重大な社会問題化しつつある現状に立ち至つております。これをこのまま放置するにおいては、人類は近い将来には遂に自己の放出した廃棄物のため窒息自滅する恐れがあるとしても、まんざら杞憂ではなさそうです。

ここにおいてか、政府当局も衛生工学部門を確立して下水道関係に限らず広く衛生工学に関する緊急事項の研究処理に資すべく決意され、大学にも衛生工学科の新設を見たものとする考えがあらわれます。

20年余のブランクを埋めて更に前進することは仲々容易なことではありませんが、吾々は一層精励、以上の諸問題の探究に努めるとともに、この方面の新進気鋭の若い技術者の育成に没頭する覚悟を新たにします。

先に水道法、清掃法、新下水道法が制定され、更に次国会には水質汚濁防止関係法規等制定される機運にあります。これらの諸法規の施行にともない、この方面に新たに多数の衛生工学技術者が要求されることは必然だと思われまします。

都市下水及び工業廃水の処理、放射性廃汚水の処理等すべてその研究は未だその初期に属し、その技術的に究明すべき問題は無限であつて、その解決は大学の一小教室にとつては、前面に巍然として屹立した峻厳な大山嶽を踏破するやうなもので、微力をもつて幾何程これに挑み得られるか、その責任の重大さに重圧を感じざるを得ない次第であります。願くは関係方面の方々の大方の御鞭撻御協力によつて、その万一を達成し得られますれば望外の幸と存じます。

本誌創刊に當つて簡単ながら御挨拶申上げる次第であります。

以 上